

レナさんに耳かきして欲しいよなあ！

こっくん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

グラブルSS自体少ない

レナさんが出てくるSSも少ない

レナさんあ主要のSSは一件しか見たことない

……書くしかないよなあ！

あなたもグラブルのSSを書いてください。

目次

レナさんに耳かきして欲しいよなあ！

レナさんに耳かきして欲しいよなあ！

「今日は寝付きが悪いな……」

深夜のグランサイファー艇内、団長は寝つけずにいた。

「昨日は休みだからってゆっくりしすぎたかな？」

昨日は島に停泊しての休みだったのだ。団長はその先日の戦いもあってぐっすり。夜になってかえって寝られなかったのだ。

「軽く運動したら眠れるかな」

そうして剣を片手に甲板へ出ていくことにした。

甲板に出るとそこには先客が居た。かぐわしい花の香り、扉を開けると船首でレナが花を振りまいていた。

「それえっ」

杖を振るごとに宙に花が生み出され、はらはらと散っていく。

その花びらは魔力の光を灯し、真つ暗な甲板を彩っていた。

「わあ」

思わず団長も感嘆の声をあげてしまう。

それに気づいたレナは船室の方へ振り向いた。

「あらあら団長さん。こんな遅くにどうしたの？」

そう言つて団長へ歩み寄る。

「ああ、レナさん。昨日ゆっくりしててかえって寝付けなかったんだ。だから訓練でもね。」

「あらまあそうなの。休んで寝付けられないなんて、働き過ぎじゃないかしら。」

「いやまあ、そんなに働いてばっかりでもないよ。ところでレナさんはなんでこんな夜遅くに？」

「そうねー。夜中にちよつと起きて花を咲かせないと樹木化が進んじゃうの。」

あつげらかんと言うが、団長にとっては重い言葉だった。

今でこそ慣れたふうだが、昔の苦労を思うと少し言葉に詰まってしまうのだった。

「……………」

「あらあら。そんなに心配しないで。もう昔からだから慣れっこよ。」
「でも、うん。」

少しの間見つめ合う。

そこでレナが思い出したかのように切り出した。

「ところで団長さん。ひとつだけお願い聞いて頂けないかしら?」

「あ、ああいいよ。なんでも。」

「ありがとうね。団長さん……………そうね……………」

レナが団長を見つめる。団長は夜風に吹かれて少し震えていた。

訓練するつもりで少し薄着で出てきたからだ。

「ティーカップもいいと思ったのだけど……………団長さん、ついてきてくださる?」

そう言つて団長の手を取つて船室へ戻る。

団長はレナに手を引かれて船室へ戻る。思わぬ力の強さに少しよろけつつ。

レナはスタスタと船室を歩き、男女船室の分かれ道を女性船室側へ曲がった。

「ちよっ!レナさ」

「団長さん。みんな起きちゃうわ。お静かにお願いね。」

驚いた団長の口を手で塞ぎ、指を手当てていたずらっぽく言う。
そしてなお強く団長の手を引いていった。

団長はついにレナの部屋へ入ってしまった。

「キッチンからお湯を貰つてくるから、少し待っててね。」

そう言ふとレナは団長を置いて部屋を出て行ってしまった。

団長は今更になつて驚きから抜け出したのか、冷静さを取り戻していた。

そうして考えてみると、レナさんが悪いことをするとも思えないし、大人しく待っていることにしたのだ。

お茶会用の丸椅子をひとつ取り出して座り、部屋の様子を見る。

レナの部屋は意外にも花いっぱい飾られているという訳でもなく、花は魔生花でない魔法の花が一輪さしてあるだけだった。

家具はベッドと机とクローゼット、あとはお茶会用の丸机と椅子だけだった。

少しするとレナがお湯ときれいな布を持って戻ってきた。

それを一度机に置くと、丸机をベッドの近くに寄せて、机からいくつかものを取り出して丸机の上に置いた。ついでお湯も丸机の方へ移した。

ベッドの枕を隅へ寄せて、ベッドの端に座る。

「団長さん。こちらへどうぞ?」

そう言ってももを叩く。

団長はまた混乱していた。

「…………… どういうこと?」

「これが私のお願い。団長さんが私の呪いを解くために頑張ってくれてるから、たまにはお世話したいの。」

「お世話って……………」

「団長さん、お願い聞いてくれないの?」

そうレナが残念そうな顔をする。

お願いを聞くと言った手前、団長には断ることができなかった。

「じゃあ団長さん。靴を脱いで横になつて?」

言われるまま、体をベッドに預けてレナの膝枕に頭を乗せる。

「今日は寒いからお布団かけてあげるわね。」

レナが団長に布団をかける。布団はレナの香りがして、全身を包まれているようだ。

「あらあら、真っ赤になって。案外団長さんも初心なのね。」

そう言いながらふ布巾を手に取り、水気を切る。

「団長さんは耳かきつてされるかしら? カリオストロちゃんから聞いたのだけど、ほかの人にしてもらう耳かきつてすぐく気持ちいいらしい。」

いわね。」

手に取った布巾を耳に当てる。

「まずはお耳と、その周りを拭いて差し上げるわ。」

「耳の溝みたいなところをなぞるように拭いて……。」

すすすと布と皮膚の擦れる音をたてながら、耳を拭いていく。

「耳の裏も意外と汚れるらしいわあ……。」

耳をたたみながら、耳の裏を拭く。

「あとは耳穴をちよつと押さえて、耳を蒸らしちゃうわ……。」

耳穴を押さえると、レナの血の流れる音が耳に響く。

「うん！いい感じね。じゃあ今度は逆側の耳を見せて頂けるかしら。」

「あらあら、恥ずかしがらなくていいのよ？お腹より木の方が多いわ。」

「ごっちも拭いていくわね……。」

先程と同じように団長の耳を拭いた。

「よし！じゃあ耳かきをするわよ。」

布巾を机に置くと、代わって耳かきを手に取る。

団長の耳を覗き込むと

「あらあら、随分汚れてるわ。いつもお外で転げ回ってるからかしら。」

丁寧に、奥に落とさないように手前から奥へ少しずつ耳垢を取っていく。

「……よし、取れたわ。梵天で細かいのを取ってしまいましたしょう？」

耳かきを持ち替えて、梵天にする。

「ほら、ふわっふわ。」

もそもそと耳に音が響き、くすぐったくも気持ちいい。

「気持ちいいかしら？……そう！恥を忍んでお願いしてみてくださいよかったですわあ。」

「じゃあ反対側…… あら？ あらあら団長さんもう眠たいの？ 少し我慢して、反対側にだけ向いてくれるかしら。」

団長に反対を向くようお願いしようとする、もう団長は半目で眠たげだった。団長は半分寝ぼけながら反対へ向き直す。

「あらあらまあまあ。こっちも随分…… やりがいがあるわね。」

また同じように手前から奥に耳かきをしていく。

「人の耳って、左右で作りが少し違うのね。」

丁寧に、耳穴を撫でる。

「あらまあ、ここが気持ちいいのね。」

レナは耳かき中の団長の反応の機微から、気持ちいいところを的確に見つけた。

そこを重点的に、でも傷つけないように撫でる。

そんなふうに行っているうちに、団長の息が規則的になった。

「…… もう寝ちゃったかしら？」

そう言いつつ、耳かきを持ち替えて梵天をかまえる。

「梵天で払って、おしまい。」

梵天で耳の外から穴の中まで残りを払い、耳かきを終わりにした。

団長はもうぐっすり眠りについてしまったようだ。

「もうぐっすりみたいね。どうしても起きなさそうだわ。」

団長はレナの膝の上でぐっすりと眠ってしまった。レナは団長を起こさないように枕を元の位置に戻し、布団に潜り込む。そして団長を自分の方へ向ける。

「うふふ。弟も居たことはなかったけど、まるで弟みたいで可愛いわ。」

腕を枕にして胸に抱え込み、レナは目をつぶった。

「おやすみなさい団長さん。今日はありがとうね。」